

シカゴ大学時代のジョン・デューイの書簡について(5)
—シカゴ大学教育学部の組織改革をめぐって：1902年～1903年—

小 柳 正 司

(2006年10月13日 受理)

The Correspondence of John Dewey During His Chicago Years (5)
—Concerning the Reform of the University of Chicago School of Education:1902-1903—

KOYANAGIH Masashi

Abstract

The purpose of this paper is to examine John Dewey's correspondence during his Chicago years, especially from May 1902 to May 1903.

In May 1902, Dewey was erected the Director of the University of Chicago School of Education. At the same time, the Department of Education, which he had served as head professor, was merged into the School of Education, so that there arose some problems for him to reorganize the School.

At first, he had to constitute the new curriculum for professional teacher training. Until then, the curriculum of the School had been for training only elementary school teachers, because the School had been just a two-year normal school, which admitted the persons who completed four-year high school education. On the other hand, the Department of Education had engaged in training secondary or normal school teachers for the University students. The new School of Education, both Dewey and President Harper of the University thought, should become a professional school of the University in reality as well as in name to train not only elementary school teachers but also secondary or normal school teachers, principals, superintendents, and other special kinds of teachers. From the beginning of the year 1902-1903, the School had become a four-year institute corresponding to the Senior College of the University.

Secondly, there was a troublesome situation which disturbed the plan to carry out the University High School from the unification of the two existent secondary schools, namely the South Side Academy and the Chicago Manual Training School, into the new building of the School. The former school was a college preparatory school, while the latter was a secondary technological school. Dewey

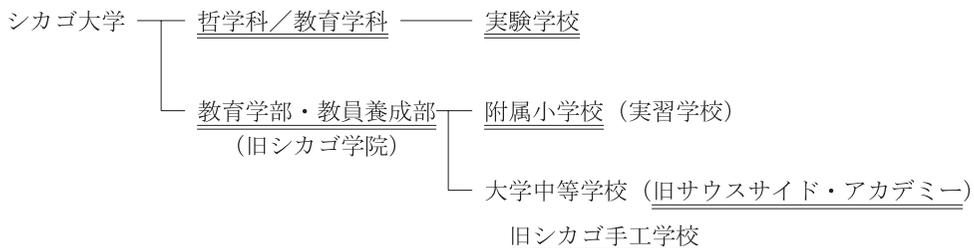
envisioned that the University High School should be an experimental school which worked out a new type of secondary education to integrate the traditional academic curriculum with the technological or industrial training. Also, it should serve the teacher training for more populist type of high school in democratic society. However, the Dewey's purpose was too idealistic to be accepted by the faculties of those two secondary schools.

Third, there was one more troublesome situation about the merger of the two elementary schools, namely the Laboratory School and the University Elementary School. The former had been under Dewey's directorship, while the latter had been the practice school of the School of Education and substantially the model school of Francis Parker's educational doctrines. When Dewey decided the merger, he also proposed the dismissal of some members of the University Elementary School and the reducing of the teachers' salaries. In addition, he intended to make his wife Alice Dewey the principal of the new Elementary School. Consequently, there had arisen a deep antagonism between Dewey and the faculty of the School of Education, which finally led up to Dewey's resignation from the University of Chicago.

1. 教育学部の組織改革

1902年5月20日、デューイはシカゴ大学理事会から正式に教育学部 (School of Education) の学部長 (director) に任命された。その結果、彼はシカゴ大学の哲学科 (Department of Philosophy) と教育学科 (Department of Education) の主任教授 (head professor) を務めるかわり、それまで監督してきた教育学科の実験学校 (Laboratory School) とシカゴ大学中等学校 (The University Secondary School) に加えて、新たに教育学部の教員養成部 (College of Education) と附属小学校 (The University Elementary School) を監督することになった。しかも、大学中等学校は旧サウスサイド・アカデミーと旧シカゴ手工学校 (Chicago Manual Training School) という2つの学校の寄り合い所帯であったから、実質的には彼は全部で6つの学校組織を一人で監督することになったのである。

デューイが教育学部長に就任した段階で彼が監督することになった各学校組織の関係を図で示すと次のようになる。



これらの各組織は、それぞれに教育目的が異なっていた。教育学科は現職教員を対象とする博士課程大学院であり、教育理論の科学的研究と教育専門職の養成を目的にしていた。そこに付設された実験学校は教育理論の実験・開発のために設立されたもので、教員養成のための実習校とは根本的に性格を異にしていた。これに対して、教育学部は初等教員養成を目的とする2年制のカレッジであり、その附属小学校はまさに教員養成のための実習校であった。旧サウスサイド・アカデミーはシカゴ大学に学生を送り出す進学準備の中等学校であり、旧シカゴ手工学校は工業技術系の中等学校であった。そして、これらの学校の教員スタッフは、各々自分たちの学校の教育方針にしたがってそれぞれ独立に学校を運営していた。

管理職としてのデューイのこれまでの経験は、7人の教員スタッフを擁する哲学科と、4人の教員スタッフを擁する教育学科、それに15人の女子教員と1人の男子教員からなる実験学校に限られていた。しかし、いまや彼は約100人の教員スタッフと年間約70万ドルの予算とを一手に監督することになった¹。しかも問題は、監督下にあるスタッフと予算の規模が大きくなったということだけではなかった。より根本的な問題は、種類の異なるこれら6つの学校組織と各々の教員スタッフの間を互いに調整して、シカゴ大学に幼稚園から大学院に至るまでの一貫した学校組織をつくり上げ、その中で初等教員養成、中等教員養成、教育専門職養成、さらには教育理論の研究・開発を総合的におこなっていく体制をつくり上げることであった。それはもともとハーパー学長がシカゴ学院の併合に際して当初抱いていた構想でもあった。ハーパー学長は、パーカーの後任の教育学部長にパーカーの右腕であったジャックマンではなくデューイを指名するようブレイン夫人を通してシカゴ学院側に強く働きかけたが、それは自分の構想を実現できるのはデューイをおいて他にいないと考えたからであった。

デューイの教育学部長就任により、彼が主任教授を務めていた教育学科は大学本体の学科としては廃止された。そして、エラ・フラッグ・ヤングをはじめとする教育学科の教授スタッフは教育学部の所属となり、教育学部の教員養成部 (Professional Department) で教育学関係の授業科目を担当することになった²。ハーパー学長は、教育学科が教育学部に編入されたことで「初等教育のみならず中等教育も教育学部の組織の一部を構成するという当初の契約で企図されていた大計画が完成した」と述べている³。

ここで彼が言っている「大計画」とは、シカゴ学院の編入にあたって新たに中等教員養成コースをこれに加え、教育学部を初等教員養成と中等教員養成をおこなうプロフェッショナル・スクールとして組織し、これに幼稚園から小学校、ハイスクールにいたる一貫校を併設するというものであ

¹ Robert L. McCaul, "Dewey and The University of Chicago, Part II : April 1902-May 1903," *School and Society*, April 8, 1961, p. 180.

² *Annual Register 1901-1902*, The University of Chicago (Chicago : The University of Chicago Press, 1902), p. 121, 参照.

³ William Rainey Harper, "The President's Report," in *President's Report 1892-1902*, The University of Chicago (Chicago : The University of Chicago Press, 1903), p. lxxxiv.

る⁴。しかしながら、パーカー存命中は、双方の取り決めにより、教育学部には初等教員養成をおこなう教員養成部と附属小学校（幼稚園を含む）が置かれて、初等教育部門はパーカーが監督することとし、他方、中等教育部門についてはサウスサイド・アカデミーとシカゴ手工学校を大学中等学校（University Secondary School）に位置づけて、当面はデューイの教育学科の管轄下に置くこととした。そして、将来デューイが大学中等学校長の職を辞した時点で、大学中等学校を教育学科から教育学部の管轄に移し、附属小学校とあわせて初等・中等の一貫校を組織することが取り決められていた。

しかし、取り決めから1年もたないうちにパーカーが死去し、デューイが教育学部長になったことで、教育学科が廃止されて教育学部に統合され、その結果、教育学科の管轄下にあった大学中等学校も教育学部の管轄に移ることになった。こうして教育学科と教育学部が一つになり、大学中等学校も教育学部の管轄下に入り、教育学科の実験学校を含めてすべての学校組織がデューイの監督下に一つに統合されることになったわけである。1902年5月31日に開かれた会議で、教育学部、教育学科、サウスサイド・アカデミー、シカゴ手工学校、そして実験学校の計5つの学校の教員組織（faculty）は、一人のディレクターのもとに、一つの教員組織となることが確認された⁵。ハーパー学長にしてみれば、シカゴ学院編入に当たって当初彼が構想していた「大計画」は、意外にも早期に実現できることになったわけである。

しかし、その実現のためには、初等教員養成をもっぱらとしてきた旧シカゴ学院以来の教員養成部のカリキュラムを改変して、新たに中等教員養成コースを用意しなければならなかったし、旧教育学科の実験学校と旧シカゴ学院の附属実習校という二つのそれぞれ別個に新教育を試みてきた小学校を統合すること、さらにはサウスサイド・アカデミーとシカゴ手工学校というまったく性格を異にする二つの中等学校（前者はシカゴ大学への進学準備校、後者は中等レベルの工業技術学校）を名実ともに大学中等学校として一つの学校にすることなど、解決しなければならない課題が山積していた。

デューイは教育学部長に就任後、ハーパー学長の協力のもとに、ただちに教育学部の組織改革に取り組んだ。1902年6月初め、教育学部の組織について検討する委員会が教育学部教員会議の決定にしたがって学長によって任命された。委員は、教育学部長のデューイ、教育学部主幹（dean）のジャックマン、旧サウスサイド・アカデミーの主幹（dean）で大学中等学校の主幹を兼務するウィリアム・オーウェン（William Bishop Owen）、附属小学校の代表として教育学部地理教育准教授のゾニア・ベイパー（Zonia Baber）、教育学科および実験学校を代表してエラ・フラッグ・ヤング（Ella Flagg Young）の計5名であった⁶。また、教育学部の新校舎であるブレイン・ホールの設計・

⁴ Chicago Institute & University of Chicago to To whom it may concern, February 6, 1901. これはシカゴ学院理事会とシカゴ大学理事会が取り交わした合併にあたっての合意文書である。

⁵ Harper, op. cit. p. lxxxiv.

⁶ Wilbur S. Jackman to John Dewey, June 3, 1902.

施工について検討する委員会も設置され、委員にはデューイ、ジャックマン、オーウェンの他、旧シカゴ手工学校校長（director）のヘンリー・ベルフィールド（Henry Holmes Belfield）、教育学部体育主事のカール・クロー（Carl Johannes Kroh）、シカゴ大学地理・地質学教授のサリスバリー（Rollin D. Salisbury）、教育学部歴史・文学教育教授のエミリー・ライス（Emily Jane Rice）、その他2名の計9名が任命された⁷。組織委員会の議長にはジャックマンが、建物委員会の議長にはデューイがなった。

ジャックマンの組織案

教育学部主幹のジャックマンは、1902年6月10日付で学部長のデューイに長文の手紙を書き送り、その中で教育学部の組織体制と将来計画について自分の考えを詳細に説明している⁸。

(1) 教授会自治の原則

ジャックマンはまず、学部の運営について「教授会（faculty）の全構成員がなんらかの形で発言権をもつ」ことを原則に掲げている。具体的には、学部長を学部運営の統括的な責任者とし、個々の実務上の事項については各部署の責任者の裁量権を認め、あるいは教授会の諸委員会（faculty committees）の決定に従うことを求めている。これは学部長によるトップダウン方式の権限行使を大幅に制限し、教授会と各委員会によるボトムアップ方式の学部運営を主張するものであった。

ジャックマンのこの主張は、1902年4月30日付けで彼がハーパー学長に書き送った意見書で既に表明されていた主張と同じものである⁹。ジャックマンは、教育学部が新学部長のデューイのもとで大学本体による管理・運営に組み込まれることをなんとしても避けたかったのである。そして、教育学部の運営を大学本体とは別個に、教育学部教授会構成員による自治としておこなわれることを強く望んだのである。おそらくこれはジャックマン一人の考えではなく、旧シカゴ学院以来のおおかたの教員スタッフの考えでもあったであろう。

ジャックマンは、先のデューイへの手紙の中でパーカー存命中の時のことに触れ、そのころは教授会の諸委員会はあまり活用されず、慣例も未確立で、学部長のパーカーが自分の裁量で、あるときには教員会議の意向に従い、あるときにはそれに反する決定をくだしていたと述べている。そして、こうしたやり方は単純で率直なものだったが、パーカーというカリスマがいてこそ機能したもので、パーカー亡き今となってはいたずらに混乱を招くだけだと述べ、上述のような新しい体制の提案をおこなっている¹⁰。

⁷ Alonzo K. to William Rainey Harper, June 3, 1902.

⁸ Wilbur S. Jackman to John Dewey, June 10, 1902.

⁹ Wilbur S. Jackman to William Rainey Harper, April 30, 1902. 拙稿「シカゴ大学時代のジョン・デューイの書簡について（4）——シカゴ学院の併合からデューイの教育学部長就任まで：1901年～1902年——」『鹿児島大学教育学部研究紀要—教育科学編—』第54巻、2003年3月、171頁参照。

¹⁰ Wilbur S. Jackman to John Dewey, June 10, 1902.

(2) 附属小学校の組織

次に、ジャックマンは2つの小学校（すなわち、教育学部の附属小学校と教育学科の実験学校）の統合問題について3つの選択肢を示して、それぞれのケースについて自分の意見を述べている。

第1は、この秋に両校を統合する案である。第2は、この秋に両校は合併せず、2校の教員組織は別々のままとし、教育学部の附属小学校の教員の空席は一部で2つの学年を合体させることでのぐという案である。第3は、この秋に両校は合併せず、教育学部の教員の空席は新規採用で埋めるという案である。

ジャックマンは第1案がベストだと思っていると述べている。第2案では新規採用はらず人件費の節約にもなるが、教育実習の際、実習生は学年ごとに割り当てられることになっているので、2つの学年を合わせて担当する教員の負担が過重になるとジャックマンは指摘している。また、第3案では、近い将来に両校が合併するときに解雇されるかもしれないという不安があつては、すぐれた教師を採用することはできないとジャックマンは述べている。第1案ならば、附属小学校の将来の発展計画から見ても、また教員組織の合理的編成という点から見ても、うまくいくとジャックマンは述べている。

さらに、ジャックマンは附属小学校には校長（principal）をおくことが是非とも必要だと述べているが、任命は組織計画が決定してからにすべきで、そのときには強力な人物を校長に就けるべきだと述べている。この件については、7月にジャックマンとデューイとハーパー学長の間で、地理教育准教授のゾニア・ベイバーを臨時的校長に任命することで話し合いがなされている¹¹。

(3) 教育実習

ジャックマンは、現行の教育実習の体制について次のように説明している。

- ① 実習生は幼稚園から第8学年までの各学年に対応して9グループに分けられる。
- ② グループごとに責任者をおく。
- ③ 各グループに指導教員がつき、教科にかたよりが生じないように授業を割り当てる。
- ④ 実習生は割り当てられた授業計画を準備する。教員養成部（Pedagogic School）の各教科の専門教員は実習生の授業計画の準備を指導する。
- ⑤ 指導教員、ときには専門教員による検討を受けた後、授業をおこなう。
- ⑥ 授業がおこなわれている間、残りの実習生と指導教員と最低一人の専門教員は授業を参観する。
- ⑦ 実習時間（今年度は9:30～10:30）の終わりの10分間に、グループで指導教員と専門教員を加えて批評会をおこなう。
- ⑧ 毎週1回、1時間、指導教員か批評教員のいずれか、またはその両者が加わって、グループで「授業研究会」を開く。ときにはこの時間に指導教員による模範授業がおこなわれる。

¹¹ William Rainey Harper to To whom it may concern, July 5, 1902 ; John Dewey to Wilbur S. Jackman, July 22, 1902 ; John Dewey to Wilbur S. Jackman, July 26, 1902.

⑨ 2カ月ごとに各グループは学年を変わる。実習生は新しい教科を割り当てられる。

⑩ 今学期、18人の大学院生が3グループに分かれて、1カ月間見習教員（cadet）として働いた。いっさいの講義の受講を免除され、指導教員のもとで一つの学年の担当に専念した。

ジャックマンは、以上のような教育実習のやり方について利点と問題点を整理して示している。利点としては次の2点をあげている。

① 学校全体が一時期に実習に注意を向けることができる。

② 批評の機会を十分に確保できる。

問題点としては次の7点をあげている。

① 教職経験のある者となない者の区別をおこなっていない。

② 特別授業をおこなう機会がない。

③ 教員養成課程の学生の全員が一時期に附属小学校に行くのは、多かれ少なかれ混乱を招く。

④ 午前中の授業時間を使いきるので、指導教員が自分の生徒を教える時間が少なくなる。

⑤ 実習生が附属小学校で教える内容を教員養成課程で教えようとするのは、「その場しのぎ」の準備の習慣をもたらす、皮相であり、実習生の自立心を減じることになる。

⑥ 新入生は、附属小学校のやり方を学んだり実習でおこなう課業の意味を理解したりする以前に、附属小学校の生徒たちの方に向かってしまう。

⑦ 現行のやり方は、実習生の数がわずかでも増えれば完全に不可能になってしまう。現在は各学年15名の生徒に対して10～12名の実習生が配属されている。

以上のように問題点を指摘したうえで、ジャックマンは次のような改善策を提起している。すなわち、学生たちはグループとしてではなく、もっと一人一人きめ細かく扱われるべきこと。教育実習は、準備ができたことが証明されたときにおこなうようにすべきこと。そのためにジャックマンは、学生たちを次のような4つのカテゴリーに分け、それぞれのカテゴリーに応じて教育実習の要件を多様化すべきだと論じている。すなわち、①教職未経験の新入生、②教職未経験の2年生、③2年コースに入学した教職経験者、④入学後ただちに3年次を開始できる者の4つのカテゴリーであり、入学時点で学生全員を審査して、いずれのカテゴリーに属するかを決定すべきである。

また、教育実習そのものについても、次のような段階区分を設定すべきであると述べている。すなわち、①観察期間、②グループ授業：少人数の生徒対象、③クラス授業：多人数の生徒対象、④ルーム授業：一つの教室を一人で1時間以上担当する、⑤見習：実習生は多くのまたは全部の講義の受講を免除されて、文字通り補助教師となる、⑥個別課題：実習生は特別な課題を与えられ、レポートを作成する。

(4) 上級学生向けの特科コース

ジャックマンは、教職経験者やより高いレベルの教育を求める人々から、特科コースについての問い合わせが多数きていることに触れながら、現在のところそうした人々には「3年次」プログラムで対応するしかないが、これは教職未経験者向けの全科コースにすぎないので、これでは小学校

の指導主事や教育長、さらには教科の専門性を深めたいと思っている教職経験者を逃してしまうことになる」と論じている。そして、こうした高度な専門性を求める教職経験者をひきつけるために、第1年次と第2年次と第3年次とをそれぞれ明確に分化させて、手工、家庭、地理、歴史、理科、芸術について特科コースを設置すべきであると提案している。

デューイの対応

(1) 教授会自治の原則

上述のジャックマンの組織案のうち、教授会自治の原則については、デューイにどのような考えがあったのか、それを直接知る文書はない。しかし、この時期のデューイとジャックマンのやり取りを見てみると、デューイはジャックマンの意向をかなり取り入れながら、教育学部長としてハーパー学長に要望や意見を出している。教育学部の運営をめぐるデューイとジャックマンの間に決定的な意見対立がないかぎり、ジャックマンがデューイに求めた教授会自治の原則、つまり学部長はジャックマン自身をはじめとする教育学部の教員スタッフの意向を踏まえて決定をくださべきだという原則を、デューイはそれなりに尊重して仕事を進めていたと思われる¹²。1902年8月4日付のブレイン夫人宛の手紙で、デューイは「教育学部のスタッフとの関係はきわめて良好です」と書いている。そして「管理職の仕事は私の性格には合いませんが、重荷にはならないでしょう」と付け加えている¹³。

(2) 2つの小学校の統合問題

次に、2つの小学校の統合問題については、どうやらデューイはジャックマンが示した3つの選択肢のうち第2案、つまりこの秋の両校の統合は見送り、附属小学校の教員の欠員は一部の学年を合体させることでしのぐという案をとったようである¹⁴。ちなみに、ジャックマンは第1案、つまりこの秋に両校を統合するという案をおしていた¹⁵。

他方、ハーパー学長は実験学校を早期に廃止したい意向を示していた。理由は教育学部の赤字が予想よりかなり大きかったことと、実験学校自体の累積赤字が無視できないことであった。実験学校を教育学部の附属小学校に統合すれば、財政的な困難を少しでも解消できるというのがハーパー学長の考えであった¹⁶。これに対してデューイは、実験学校の廃止が理事会で検討されていること

¹² 例えば、デューイは定例週会議の廃止について、教員全員の一致した意見として、それに反対だとハーパー学長に伝えている。John Dewey to William Rainey Harper, July 19, 1902.

¹³ John Dewey to Anita McCormick Blaine, August 4, 1902, p. 3.

¹⁴ ただし、最初ジャックマンは第4学年と第5学年、および第6学年と第7学年を合体させると提案していたが、実際には第4学年と第5学年、および幼稚園と第1学年を合体させることになったようである。John Dewey to Wilbur S. Jackman, July 16, 1902 ; John Dewey to William Rainey Harper, July 22, 1902.

¹⁵ Wilbur S. Jackman to John Dewey, June 10, 1902, p. 6.

¹⁶ William Rainey Harper to John Dewey, August 12, 1902. この手紙でハーパー学長は「教育学部の赤字15,000ドルは予想の3倍だ」と述べ、音楽教育に金をかけすぎていることを指摘するとともに「実験学校の廃止」は理事者たちの希望だと述べている。また、次も参照。William Rainey Harper to John Dewey, August 15, 2006. この手紙でハーパー学長は「実験学校の昨年度までの累積赤字は7,000ドルから8,000ドルになる」と述べている。

は納得できないと反論し¹⁷、実験学校の累積赤字は指摘されたほど大きな額ではないことを示して、「今のところ今年[1902 - 1903年度]もうまくやっていると私は確信している」とハーパー学長に訴えている¹⁸。そして、10月の新学年開始直後、実験学校校長のデューイ夫人が1902 - 1903年度の実験学校の賃金台帳を作成してハーパー学長に提出した際、学長は予算の超過支出が生じないことをデューイに念押し¹⁹、これに対してデューイは賃金の総額は予算額よりも少なくなることを強調している²⁰。結局、実験学校はデューイ夫人を校長としてこの年度が終了する1903年6月まで存続するが、1903年10月に教育学部の新校舎であるブレイン・ホールが完成するとともに、そこに移転して教育学部の附属小学校と統合されることになる。

(3) 教育実習

教育実習の改善と、それに関連した教員養成部のカリキュラム改革および特科コースの設置については、デューイはジャックマンの考えに大筋で一致する考えを示している。彼は、1902年6月27日付でハーパー学長宛に、教育学部のカリキュラム改革についての意見を書き送り、その中で教育学部のカリキュラムの問題点を次のように訴えている²¹。すなわち、教育学部のカリキュラムは一般のカレッジに比べてかなり過密で、事実上すべてが必修になっている。しかも学生たちは、週1時間は授業参観と実習をおこない、さらに週1時間はハンドワーク (handwork) に従事することになっている。そのうえ、教育実習の授業の準備や、野外実習、ミュージアム訪問、教材用の標本の収集などにもかなりの時間が取られるので、リレーションや社会的活動や自由な勉学の時間がほとんどもてない状態にある。そうした中で、教員の側にも学生の側にも、授業参観と実習に関して個人面談や指導に十分な時間が取れないことに強い不満が出ている。このように指摘したうえで、デューイは取るべき改善策として、①ハンドワーク (handwork) の量を減らすことと、②3年コースを設置することをあげている。そして、教育学部のカリキュラムの最大の問題点は、事実上すべてが必修になっていて、選択の余地がまったく与えられていないことだと結論づけている。

デューイは、1902年6月28日付のジャックマン宛の手紙で、先にジャックマンが6月10日付のデューイ宛の手紙で、教育実習にあたって学生を4つのカテゴリーに類別化するという考えを提案していたことについて賛意を示している。そのうえで、学生を教職歴の有無に応じて次のように4つのカテゴリーに分類したらどうかと提案している。

- ① ハイスクールを卒業しただけで、師範教育を受けておらず、教職経験もない者
- ② ハイスクール卒業よりも高い学歴を有しているが、教職教育を受けていない者
- ③ 教職経験はかなりあるが、学歴があまり高くない者
- ④ 師範教育を多かれ少なかれ受けているが、教職経験はない者

¹⁷ John Dewey to William Rainey Harper, August 26, 1902.

¹⁸ John Dewey to William Rainey Harper, October 7, 1902.

¹⁹ William Rainey Harper to John Dewey, October 30, 1902.

²⁰ John Dewey to William Rainey Harper, November 3, 1902.

²¹ John Dewey to William Rainey Harper, June 27, 1902.

デューイは、もっとよい分類の仕方があったら教えて欲しいとジャックマンに依頼し、そのうえで、要は、教職経験をもつ者には教科内容の習得をより多く求め、学歴の高い者には教職教育をより多く施すようにして、それぞれのグループのニーズにあったカリキュラムを用意することだと述べている²²。

ジャックマンは、1902年8月20日付のデューイ宛の手紙で、秋の新入学者のうちで既に師範学校を卒業している者については、ハイスクールを卒業したばかりの初学者と同じ第1学年に編入するよりも、第2学年に編入するほうがよいだろうと提案している。また、シカゴ大学に1年在籍した後この秋に教育学部に再入学してくる一人の学生についても、面談のうえ第2学年に編入することにしたと報告している。そのうえで、ジャックマンは、これらの第2学年に編入された人たちには、たとえ彼らが1年間しか在学しないとしても、教育実習の機会是完全に保証すべきであると記している²³。

教員養成カリキュラムの改革に向けて

デューイはジャックマンの組織改革案におおむね賛意を示していたと言ってよいだろう。もちろん、細かな点では意見の相違があり、また二つの初等学校（幼稚園段階を含む）、つまり教育学科の実験学校と教育学部の実習校との統合問題については二人の意見は隔たっていた。しかし、二つの初等学校の統合は早晚避けられないことであつたし、教育学部のとりわけ教員養成部（Professional Departmentと呼ばれた）の組織改革については、基本線で二人の間に大きな意見の違いはなかったと見てよいだろう。

デューイは、教育学部長に就任する以前から、教育学科の主任教授として教育専門職養成と中等教員養成に関わっていたが、教育学部長就任とともに新たに初等教員養成の問題にも関わることになった。と同時に、従来教育学科が担ってきた教育専門職養成と中等教員養成の機能を新たに教育学部に移して体制を整備し、教育学部を名実ともにシカゴ大学の一翼を担う教員養成のプロフェッショナル・スクールとして完成させる仕事を彼は引き受けることになったのである。

もともとデューイが主任教授を務めていた教育学科では、現職教員を対象にして、校長、教育長、指導主事、師範学校校長など一般の教員を指導する立場をめざす教育専門職の養成をおこなうとともに、全学の一般学生のうちで卒業後中等教員をめざす学生を対象にした教職課程も受けもっていた。カリキュラム上、前者は主としてグラデュエイト・コース（大学院課程）として開設され、後者はシニア・カレッジ・コース（学士課程3・4年段階）として開設されていた。ところが、パーカーが死去してデューイが教育学部長に就任するとともに、教育学科はデューイが主任教授を務める独立の学科ではなくなり、エラ・フラッグ・ヤングをはじめとする教育学科の4人の専任スタッ

²² John Dewey to Wilbur S. Jackman, June 28, 1902.

²³ Wilbur S. Jackman to John Dewey, August 20, 1902, p. 2.

フは、全員教育学部の教員養成部の所属となった。つまり、大学の組織上、教育学科は大学本体から離れて教育学部に編入されたわけである。その結果、先に述べたように、従来教育学科が担ってきた教育専門職養成と中等教員養成の機能は新たに教育学部に移され、パーカーの旧シカゴ学院が担ってきた初等教員養成と合わせて、教育学部を名実ともに教員養成のプロフェッショナル・スクールとして完成させる仕事が、新学部長のデューイに課せられたのである。

以下では、教育学部の組織改革からんで、シカゴ大学の公式記録文書である『年次記録』(Annual Register)の記載を参照しながら、デューイが教育学部長に就任してから教育学部の特に教員養成部(Professional Department)の教育体制がどのように改変されたかを具体的に見てみることにしたい。

シカゴ大学に編入された当初の教育学部は、それまでのシカゴ学院の体制、つまり2年制の初等教員養成機関としての体制をそのまま維持していた。教育学部が発足した年に発行された『年次記録1900-1901』によれば、教員養成部への入学条件(admission)は、原則としてシカゴ大学ジュニア・カレッジ(学士課程1・2年生段階)の入学資格要件を満たしていることとなっている。そして、2年間で小学校の全教科と心理学および教育史を学ぶことになっている。ということは、教育学部は大学本体のジュニア・カレッジと同格の置づけをもつ2年制の初等教員養成のプロフェッショナル・スクールとして出発したということである。そして、卒業とともにディプロマが授与されると記されている²⁴。

これは、シカゴ学院のシカゴ大学への編入に際して、ハーバー学長とパーカーとデューイの間で取り決めがおこなわれ、デューイの教育学科とパーカーの教育学部はそれぞれ独立の組織とし、前者は教育専門職養成と中等教員養成を担い、後者はもっぱら初等教員養成を担うという住み分けがおこなわれたためである。シカゴ学院側としては、旧クック郡師範学校以来パーカーというカリスマ的指導者を中心に築き上げてきた初等教員養成の体制をそのままシカゴ大学教育学部として継続するつもりだったわけである。そうでなければ、彼らがブレイン夫人の100万ドルの寄付金を得て、わざわざ独自にシカゴ学院を設立した意味はなかったことになる。そのため、パーカー存命中には、教育学部は旧シカゴ学院の体制をそのまま引き継ぎ、2年制の初等教員養成機関であり続けた。実際、『年次記録1900-1901』に記載されている1901-1902年度の教員養成部の開設予定科目を見ると、カリキュラムは師範学校時代とほとんど変わりがなく、「教育史」「教育哲学」「初等心理学」「授業技術」といった教育学関係の科目はパーカー一人が担当し、そのほかの大部分の科目は小学校の各教科の内容に対応した科目、例えば「初等物理」「応用数学」「小学校アメリカ史」「音読実習」「木工・金工」「料理」といった科目が並んでいる²⁵。

ところが、翌年度の『年次記録1901-1902』では教員養成部に関する記載は大きく修正されてい

²⁴ *Annual Register 1900-1901*, The University of Chicago (Chicago: The University of Chicago Press, 1901), pp. 108, 109.

²⁵ *Ibid.*, pp. 350-352.

る。まず、初代教育学部長のパーカーの死去とデューイの教育学部長就任により、「教育学科の学士課程開設授業は教員スタッフとともに教育学部に移され、シニア・カレッジの開設授業と関連づけて中等学校教員養成の授業科目を開設できるようになった」と記されている²⁶。先に述べたように、デューイが教育学部長に就任すると同時に、彼が主任教授を努める教育学科は廃止され、教育学科の専任スタッフと教育学科の開設科目は教育学部に移された。教育学科の学士課程開設授業にはシニア・カレッジ段階での中等教員養成向けの授業も含まれていたから、これが教育学部に移されたということは、教育学部はジュニア・カレッジ相当の2年制の初等教員養成の課程に加えて、新たにシニア・カレッジ段階の中等教員養成向けの授業科目を開設することになったということの意味している。しかし、中等教員養成向けの授業科目は「現時点ではまだ開設できない」と記述されていて、教員養成部のカリキュラムは主として初等教員養成向けであることが明記されている²⁷。これは、パーカーが死去したのが1902年3月であり、デューイが教育学部長に就任したのは同年5月末であるから、いわば年度途中の出来事であり、中等教員養成向けの授業科目が教育学部で開講されるのは1902 - 1903年度が始まる1902年7月の夏学期（Summer Quarter）開始以降になるということだったのであろう。

そこで、『年次記録1901 - 1902』に記載されている1902 - 1903年度の教員養成部の開設予定科目を見ると、教育学関係の科目15科目のうち10科目が旧教育学科の専任スタッフによるもの、4科目が旧シカゴ学院系の専任スタッフによるもの、残り1科目は非常勤講師によるものとなっている。そのうち、中等教育関係の科目は2科目で、どちらも3年生向けで旧教育学科の専任スタッフが担当している。それ以外の旧教育学科の専任スタッフが担当する科目8科目中、1年生向けが3科目、2年生向けが1科目、2～3年生向けが2科目、3年生向けが2科目となっている。他方、旧シカゴ学院系のスタッフが担当する4科目のうち2科目は学年指定のない夏学期の開設科目で、たぶん現職教員向けの科目であろう。残り2科目は2～3年生向けの科目となっている²⁸。旧教育学科の専任スタッフが教育学部に移って、彼らが教員養成部の教育学関係の科目を中心に担うようになったことがよくわかる。

ところが、1902年5月に発行された『大学広報』（University Record）の教育学部特集号を見ると、そこに記載されている同じく1902 - 1903年度の教員養成部開設予定科目の中の教育学関係の科目は、上記の『年次記録1901 - 1902』の記載とは大きく異なっている。『年次記録1901 - 1902』は『大学広報』教育学部特集号よりも数ヶ月あとに発行されたものであるから、『年次記録1901 - 1902』にある教育学部関係の記載の多くの部分は、『大学広報』教育学部特集号の記載をほとんどそのまま引き写しているが、いくつかの部分で加筆や削除、修正がおこなわれている。その中で、特に教

²⁶ *Annual Register 1901-1902*, The University of Chicago (Chicago : The University of Chicago Press, 1902), p. 123.

²⁷ *Ibid.*, p. 123.

²⁸ *Ibid.*, pp. 381-382.

育学関係の開設科目の部分は全面的に書き改められている。

『大学広報』教育学部特集号では、教育学関係の科目は目下再編中であるとされ、「教育学」の項目のもとに記載されているのは、哲学科で開講されるジュニア・カレッジ向けの「心理学」「倫理学」とシニア・カレッジ向けの「論理学」、それと教育学科で開講される「初等教科教授法」「精神発育論」「教育内容論」「学校論」の計7科目にすぎない²⁹。おそらく『大学広報』教育学部特集号の原稿が書かれた段階では、まだ教育学科が教育学部に編入されることが正式に決まっておらず、とりあえず教育学部の学生は「教育学」に関しては大学本体の哲学科と教育学科で開設される科目の中から指定されたものを受講するようになっていたのであろう。

その一方で、カリキュラムに関しては『大学広報』教育学部特集号で、従来の「2年コース」(Two Years' Course)に加えて、新たに「3年次」(Third Year)と「特科コース」(Special Courses)が設けられている。『年次記録1901 - 1902』でもまったく同じである。「3年次」と「特科コース」の設置は、おそらくは教育学科の編入とは直接関係なく、パーカーの存命中から既に予定されていたことであろう。「3年次」というのは、通常の2年コースに加えてさらに1年履修するコースであり、「特科コース」は2年コースないし3年次を修了した後、小学校の教科のうち特定の教科(専科)について専門を深めるためのコースである。

『大学広報』教育学部特集号の方には、1年次と2年次と3年次の履修表が掲載されている³⁰。(次頁図1参照)これらを見ると、1年次で学生はA, B, Cの3グループに分かれて実習校で授業実習をおこないながら、教員養成部で心理学と小学校の全科にわたって専門的な学習をすることになっている。2年次では心理学と小学校の全科の学習に加えて「カレッジ・コース」があるが、これはジュニア・カレッジまたはシニア・カレッジで教育学部生に履修が認められている科目の中から弱冠の科目を選択履修するものである。3年次では、教育学部の開設科目と、ジュニア・カレッジまたはシニア・カレッジで履修が認められている科目を選択履修することに加えて、新たに哲学科と教育学科で履修が認められている科目の中から選択履修することになっている。

「特科コース」については特に履修規定は記されていない。「特科コース」は学生一人ひとりの能力、適正を教員が個別に判断して履修を許可するコースで、入学時期は特に決まっておらず、指導も個別におこなわれる。

『年次記録1901 - 1902』には1年次、2年次、3年次の履修表は載っていないが、「特科コース」を含めて履修の方法は『大学広報』教育学部特集号の場合と同じであったと思われる。要するに、デューイが教育学部長に就任した時点での教員養成部のカリキュラムは、それまでの2年制の初等教員養成のカリキュラムを基本にして、それに「3年次コース」と「特科コース」を加えることを予定しているが、中等教員養成のコースの設置はまだ予定されていないことが確認できる。しかも

²⁹ *University Record*, vol. 7, no. 1, May 1902, pp. 13-14.

³⁰ *Ibid.*, pp. 10-11.

「3年次コース」は「2年次コース」をただ1年間延長して履修するだけで、全科の初等教員養成課程であることに変わりはない。ただし、「2年次コース」終了と「3年次コース」終了の時点でそれぞれ別個のディプロマが与えられることになっている。そして、これらのディプロマはジュニア・カレッジに申請すれば、それぞれ一定の割合で学士号 (Bachelor's degree) 取得のための既習得単位としてカウントされることになっている。ということは、教育学部はまだ師範学校と同様に単独で学士号を授与することはできず、学士号取得を希望する学生はディプロマを取得した後にジュニア・カレッジに移籍しなければならないということである。

【図1】1902-1903年度の教育学部の履修表

1年次

区分	第1学期 (First Quarter)	第2学期 (Second Quarter)	第3学期 (Third Quarter)
A	低学年に配属 地理 歴史 スピーチ、音読、演劇 技芸*	中学年に配属 歴史 心理学概論 数学 技芸*	高学年に配属 地理 理科 家庭科 技芸*
B	中学年に配属 歴史 心理学概論 数学 技芸*	高学年に配属 地理 理科 家庭科 技芸*	低学年に配属 地理 歴史 スピーチ、音読、演劇 技芸*
C	高学年に配属 地理 理科 家庭科 技芸*	低学年に配属 地理 歴史 スピーチ、音読、演劇 技芸*	中学年に配属 歴史 心理学概論 数学 技芸*

2年次

第1学期 (First Quarter)	第2学期 (Second Quarter)	第3学期 (Third Quarter)
教育心理学 地理 理科 技芸*	歴史 数学 カレッジ・コース 技芸*	スピーチ、音読、演劇 理科 カレッジ・コース 技芸*

3年次

第1学期 (First Quarter)	第2学期 (Second Quarter)	第3学期 (Third Quarter)
教育心理学 地理 理科 技芸*	歴史 数学 カレッジ・コース 技芸*	スピーチ、音読、演劇 理科 カレッジ・コース 技芸*

* 技芸 (Arts) には、描画 (Drawing)、彩色 (Painting)、粘土細工 (Clay-Modeling)、手工 (Manual Training、織物Textilesを含む)、身体訓練 (Physical Training)、音楽 (Music) が含まれる。

(University Record, The University of Chicago, vol. 7, no. 1, May 1902, pp. 13-14.)

先に見た教育学部の組織改革をめぐるジャックマンの意見と、それに対するデューイの応答も、こうした状況のもとでやりとりされていたわけである。ジャックマンは、教育実習について、1年次におこなう従来のやり方を改めることを提案していた。また、彼は現職教員で特科コースを希望する人が多いことを指摘し、現状ではこうした人々には3年次コースで対応するしかないが、3年次コースは教職未経験者向けの全科コースにすぎないので、3年次に手工、家庭、地理、歴史、理科、芸術の特科コースを設置すべきだと提案していた。こうしたジャックマンの提案をデューイも基本的には支持していた。この二人の意見を中心にしながら、教育学部の組織改革を検討する委員会の議論を踏まえて、教員養成部のカリキュラムはその後大きく変更されている。

特科コースの整備に向けて

『大学広報』教育学部特集号（1902年5月）が出て以降、特に現職教員の人たちから「特科コース」についての問い合わせが殺到した。これについては、先に見た1902年6月10日付けのジャックマンの意見書でも取り上げられていて、彼は現状のカリキュラムではこれらの人々の要望に応えられないので、手工、家庭、地理、歴史、理科、芸術のそれぞれの教科について専門的に学ぶ特科コースを早急に設置すべきだと提言していた。おそらく「特科コース」は『大学広報』教育学部特集号に記載があるにもかかわらず、具体的なカリキュラムが用意されておらず、それゆえ外部からの問い合わせにまったく対応できなかったものと思われる。

「特科コース」の問題は、1902年10月の新学期開始とともに外部からの問い合わせがハーパー学長のところにまで及ぶようになり、にわかには緊急性を帯びるようになった。ハーパー学長は1902年10月17日付の手紙で、この種の問い合わせに「われわれはどう返答したらよいのか？印刷物で示した内容をジャックマンと一緒に検討して、どう対処すべきか教えてくれ」と、デューイに対応を求めている³¹。これに対してデューイは、「特定の方面に専門化したいと望む人々のためのカリキュラムに関して完全な説明が可能になるまでには数ヶ月かかるでしょう」としながらも、当面は予備的な案内状を作成して、現時点で可能な範囲内で問い合わせに答えたいと述べている³²。そして、学長のもとに届いている多数の問い合わせの手紙を見せてもらえれば、それらを参考にして特に要望の強い教科を中心に「特科コース」の準備を進めることができると述べている³³。そのうえで、ジャックマンに予備的な案内状に記載する内容について急いでリストを作るよう指示している³⁴。

実は、デューイは教育学部長就任以後、「特科コース」を担当できそうな教員スタッフに個別に手紙で依頼をしていた。学長秘書のシェパードソンはこのことを問題視し、「とても困った状況だ。個々の教員が大学の業務のことで個人的に手紙を出すべきではない」と学長に訴えた³⁵。これに対

³¹ William Rainey Harper to John Dewey, October 17, 1902.

³² John Dewey to F. W. Shepardson, October 1902. シェパードソンは学長秘書。

³³ John Dewey to William Rainey Harper, October 18, 1902.

³⁴ John Dewey to Wilbur S. Jackman, October 18, 1902.

³⁵ F. W. Shepardson to William Rainey Harper, October 23, 1902.

してデューイは「何らかの方針が決定され、それにしたがって授業が開設されるまでは、個人的なコミュニケーションのやり方を認めることには利点がある」と反論し、「特科コース」の整備について自分の立場を説明する長文の手紙をハーパー学長に書いた³⁶。その中で彼は、この間の経過を次のように説明している。すなわち、7月に教育学部長の仕事を開始して以来、「特科コースがとても重要なものであることはすぐにわかった」が、特科コースは完全に無視されていて、教育学部の教員スタッフの中に「特科コース」を指導できる有能なスペシャリストがいく人もいるにもかかわらず、彼らは履修単位にカウントされる授業を一つも担当していない状況だった。そこで、彼らのうち「特科コース」に関心のある者に直接インタビューをおこない、手紙も出して、「特科コース」の授業計画をできるだけ早く出すよう求めた。その結果、かなりの量の資料が集まったけれども、多くの点で相互にまだ矛盾があって、共通の方針に沿って実行するところまではいかなかった。そのため「特科コース」の案内状を10月の秋学期開始前に発行するという当初の自分の考えは残念ながら実行できなかった。その後、10月の新学期が始まってから、今年度最初の教育学部教員会合(Faculty Conference)で教員たちに「今年度中にカリキュラムを作り上げるうえで、これ〔特科コース〕が最も重要な事柄だ」と説明して、その後も繰り返し授業概要を準備するよう要請している。このように経過説明をしたうえで、デューイは「本日〔10月25日〕の教員会議(Faculty Meeting)で特科コースを検討する委員会を立ち上げる予定だ」とハーパー学長に述べている³⁷。

しかし、10月25日の教員会議では、結局、「特科コース」を検討する委員会の設置は見送られ、代わりに既存のカリキュラム委員会の中に「3年コースと特科コース」および「4年コース(または中等教員コース)」について検討する2つの小委員会を設けることになった。前者の小委員長にはエラ・フラッグ・ヤングを、後者の小委員長にはナサニエル・バトラーを充てることにしたいとデューイはハーパー学長に進言している³⁸。

その後、1902年12月6日の教育学部教員会議に諮られる「未解決事項」を記したハーパー学長作成のリストの中にも「3年コース及び特科コース」の問題があげられている³⁹。

その一方で、教育学部主幹で理科教育教授のジャックマンは、1902年11月3日付でデューイ宛に理科教育の特科コースの授業科目編成案を書き送っている⁴⁰。おそらくはデューイが特科コースに関係する教員スタッフに繰り返し提出を求めた授業計画案の一つとして、ジャックマンが提出したものであろう。その中で彼は、それぞれの科(department)で開設される特科コースの授業科目は、他の科で開設される授業科目と相互に関連づけて編成されるべきだという原則を提起している。そして、理科教育の特科コースでは、理科を専門とする教師と理科の指導主事の養成をめざすが、単に理科という一教科についての専門性を高めるだけではなく、学校全般の諸課題に対しても幅広い

³⁶ John Dewey to William Rainey Harper, October 25, 1902.

³⁷ Ibid.

³⁸ John Dewey to William Rainey Harper, October 30, 1902.

³⁹ William Rainey Harper to John Dewey, December 4, 1902.

⁴⁰ Wilbur S. Jackman to John Dewey, November 13, 1902.

理解力を養うようにしたいという方針を打ち出している。そこには、学校のカリキュラム全体の相関 (correlation) を強調したパーカーの思想を受けついで、理科のスペシャリスト教師といえども他教科との関連を常に重視する姿勢を求めるジャックマンの考えがはっきりと示されていた。そして、具体的な授業科目編成においては、理科教育の専門科目として「自然観察」「生物」「人体生理学」「物理」「初等化学」「気象学」「鉱物学」「科学史及び科学教育史」が用意されたが、興味深いのは、例えば「物理」では産業の発達と関連づけて力学を扱うことや、「初等化学」では食品や植物との関連づけを強調していること、また「鉱物学」では産業への応用を取りあげるなど、それぞれの授業科目において理科以外の他教科の学習内容との関連づけを図っている点である。さらに、以上のような理科教育の専門科目に加えて、関連授業科目として教育学科から「一般心理学」と「教育史」を指定してデューイ自身の協力を求めるとともに、地理、歴史、文学、数学、家庭、芸術、体育、手工のそれぞれの科からも関連授業科目を指定して協力を求めたいとしている。

ジャックマンのこの授業科目編成案に対して、翌日デューイは「とても興味深い」と返事を送り、「あなたの案は他の人たちからも積極的な反応を呼ぶことでしょう」と書いている。そして、ジャックマンが提起した方針、つまり各科の特科コースの授業科目を相互に関連づけるという方針については自分もそう考えていると述べ、デューイ自身も教科の相関の考えにたってスペシャリスト教師の養成にあたることを示唆している⁴¹。

中等教員養成コースの検討

先に見たように、パーカーの死去を受けてデューイが教育学部長に就任すると同時に、彼が主任教授を努める教育学科は廃止され、教育学科の専任スタッフと教育学科の開設科目は教育学部の教員養成部に移された。それまで教育学科は中等教員志望者向けに教職科目を開いてきていたので、教育学部はそれまでの2年制の初等教員養成機関としての体制に加えて、新たに中等教員養成の役割もあわせもつことになった。そのための体制整備も新教育学部長のデューイに課せられた重要な課題であった。

デューイは、教育学部長就任早々の1902年6月9日付の手紙でハーパー学長に「中等専門職コース」(Secondary Professional Course)の設置について打診し、学長から「早いうちに貴殿と話し合いたい」という返事をもらっている⁴²。その後、中等教員養成の体制整備についてどのような話し合いや検討がなされたのかは不明であるが、1902年10月25日の教育学部教員会議で、カリキュラム委員会の中に「3年コース及び特科コース」とともに「4年コース(または中等コース)」について検討する小委員会が設置されることが決定されている⁴³。そして、ハーパー学長が作成した1902年12月6日の教育学部教員会議に向けた「未解決事項」のリストにも「中等教員養成のための4年

⁴¹ John Dewey to Wilbur S. Jackman, November 14, 1902.

⁴² William Rainey Harper to John Dewey, June 14, 1902.

⁴³ John Dewey to William Rainey Harper, October 30, 1902.

コース設置の検討」があげられている⁴⁴。どうやら中等教員養成のためのコースは4年制で考えられていたようである。

それもそのはずで、旧教育学科の中等教員志望者向け教職科目は大学において学士号取得をめざす者を対象にしており、ハイスクール卒業者を対象にした旧シカゴ学院の2年制の初等教員養成とは対象学生が明らかに違っていたからである。教育学部の小委員会において「3年コース」と「特科コース」があわせて検討されているのも、もともと初等教員養成がジュニア・カレッジ相当の2年制の課程で、そのレベルアップを図るべく「3年コース」と「特科コース」が検討されているのに対して、中等教員養成ははじめからシニア・カレッジ相当の4年制の課程として考えられていたわけである。

ちなみに、『大学記録1902 - 1903』を見ると、1903 - 1904年度から教育学部教員養成部のカリキュラムに「中等学校教員および師範学校教員志望者向けコース」(Courses Preparatory to Teaching in Secondary and Normal Schools)が新たに設置されている⁴⁵。おそらく、このコースは上記の「4年コース(または中等コース)」について検討する小委員会によって設置が検討されたものであろう。

2年制の初等教員養成学部から4年制の初等中等教員養成学部へ

1902年11月25日付でデューイはハーパー学長に手紙を書き、教育学部の将来計画について近々話し合いたいと申し入れている。これは、具体的な実務についての相談ではなく、教育学部の目的と範囲について、一般的な方針を学長との間で確認しておきたいということであった⁴⁶。二人の面談は12月1日におこなわれ、水準の引き上げということで合意している⁴⁷。水準の引き上げとは、教育学部を2年制の初等教員養成中心の体制から中等教員養成を含む4年制の体制にすること、さらにそれに加えてEd. D(教育学博士号)が取得できる大学院課程も設置することである。

デューイは12月3日付のハーパー学長宛の手紙で、12月6日に教育学部教員会議が開かれるが、その前に自分が議長を務める組織委員会のレポートを学長に検討してもらい、その後他の委員会メンバーにもレポートを送って承認を得たいとしている。そのレポートは12月1日に学長と話し合った内容に沿ったものだと記している⁴⁸。これに対して、ハーパー学長は12月4日付で返事をよこし、12月6日の教育学部教員会議には出られないので、継続審議事項を記したメモを同封し、デューイに会議の進行を依頼している⁴⁹。その継続審議事項とは、以下のようなものである。

⁴⁴ William Rainey Harper to John Dewey, December 4, 1902.

⁴⁵ *Annual Register 1902-1903*, The University of Chicago (Chicago : The University of Chicago Press, 1903), pp. 138-140.

⁴⁶ John Dewey to William Rainey Harper, November 25, 1902.

⁴⁷ *Ibid.* このデューイからの手紙の余白にハーパー学長が記したメモによる。

⁴⁸ John Dewey to William Rainey Harper, December 3, 1902.

⁴⁹ William Rainey Harper to John Dewey, December 4, 1902.

1. 組織委員会（デューイ議長）のレポートについて
2. 建物に関する臨時委員会（ジャックマン議長）のレポートについて
3. カリキュラム委員会（サリスバリー議長）のレポートについて
 - (1) 3年コースおよび特科コースの問題
 - (2) 中等教員養成のための4年コースの検討

どうやら教育学部の全般的な組織改革の協議がこの時期あたりから大詰めをむかえていたようである。

12月5日付でデューイはジャックマン宛に、明日（12月6日）のカリキュラム委員会前に師範学校の件で話し合っておきたいと書き送っている⁵⁰。ここで師範学校の件というのは、教育学部の専門教育を師範学校卒業者向けの大学院相当の教育（a sort of post-graduate work）にする計画のことである。この問題では、既に2、3週間前にデューイ、ジャックマン、それにシカゴ大学社会科学科主任教授のアルビオン・スモール、教育学部教育学教授のナサニエル・バトラーの4人で協議がなされ、ジャックマンが取りまとめ役になってカリキュラム委員会に提起することになっていた。

デューイは、1903年1月27日付のハーパー学長宛の手紙で、ジャックマンがこの件でとても熱心に取り組んでいること、認定校（accredited school）のリストを作成するため、春学期（4月～6月）には彼が各地の師範学校を訪問する予定であることを伝えている⁵¹。そして、師範学校での履修科目は既修得単位としてどのように扱われることになるのか、大学当局の責任者に問い合わせている⁵²。

デューイは、1903年1月29日付のハーパー学長宛の手紙で、彼が議長を務める組織委員会のレポートについて、以下のような要点を書き送っている⁵³。

- (1) ハイスクール課程の上に2年間の基礎必修課程（a two years' prerequisite）を置くことにした。これは、1902 - 1903年度以降、教育学部の正規学生（classified student）の入学条件が「少なくとも4年間のハイスクール課程の上に2年間の学業を修めていること」と改められたため⁵⁴、ハイスクール卒で入学してくる非正規学生（unclassified student）のために2年間のいわば予科の課程を置くことにするものである。これについてデューイは、教育学部の教員スタッフが全会一致で賛成してくれそうなので、自分の予想よりも早期に実現できそうだと述べている。そして、非正規学生で従来のように2年間で学業を終了する者のために、准学士号（the title of associate）を当面の間は残すことにしたと述べている。

⁵⁰ John Dewey to Wilbur S. Jackman, December 5, 1902.

⁵¹ John Dewey to William Rainey Harper, January 27, 1903.

⁵² John Dewey to Wilbur S. Jackman, January 28, 1903.

⁵³ John Dewey to William Rainey Harper, January 29, 1903.

⁵⁴ *Annual Register 1902-1903*, The University of Chicago (Chicago : The University of Chicago Press, 1903), p. 132, 参照.

- (2) 大学に入学してから教員養成の専門教育を受けることを希望する学生のために、ジュニア・カレッジにグループ・コースを設置する。これも自分の予想よりかなり早く実現できそうだとデューイは述べている。しかし、当分の間、教育学部は学生の多くを師範学校出身者に求めることになるとも述べている。
- (3) 現在おこなわれているような初等教員養成と中等教員養成の間の区別をなくしていく。初等と中等という分け方よりも全科 (general) と専科 (specialized) という分け方にする。こうすれば、手工、美術、音楽など、初等教員養成と中等教員養成という区別に根拠のない教科にも対応できる。
- (4) 研究職博士号のPh.D.と区別して専門職博士号としてEd.D.を新設する。これはまだ委員会にも提起していない自分の思いつきにすぎないが、もしニューヨークのコロンビア大学ティーチャーズ・カレッジがわれわれと同時にEd.D.を新設してくれれば、この学位は世間に認知され、法律や医学の分野と同様の専門職学位が教職の分野にも広く認められることになるだろうとデューイは述べている⁵⁵。

教育学部の新体制 (1903 - 1904年度)

これまで見てきたような教育学部の組織改革に関する一連の議論を踏まえて、1903 - 1904年度から教育学部は、それまでのジュニア・カレッジ相当の初等教員養成学部からシニア・カレッジ相当の初等・中等教員養成学部へと体制を大きく変えることになった。教育学部の新しい体制をシカゴ大学の『年次記録1902 - 1903』(1903年発行)に記載されている教育学部の案内で確認してみよう。

『年次記録1902 - 1903』では、まず教員養成部の一般的な説明として、それまでの初等教員養成に加えて中等教員養成をおこなうことが明記されている⁵⁶。

その上で、教員養成部への入学条件が前年から大きく変更されている。すなわち、それまでは教員養成部への入学条件は、原則としてシカゴ大学ジュニア・カレッジの入学資格要件を満たしていることとなっていたが、『年次記録1902 - 1903』では「少なくとも4年のハイスクール課程の上に2年間の学業を修了している者」となっていて、「この2年間の学業はカレッジでもよいし教員養成学校でもよい」となっている⁵⁷。つまり、入学条件がジュニア・カレッジ相当からシニア・カレッジ相当に2年分引き上げられたわけである。これは、ジュニア・カレッジ段階を終了して教職をめざす者、あるいは師範学校の2年課程を修了してさらに高いレベルの教師教育を受けようとする者を入学者として予定しているということを意味している。さらに、卒業時点で修了者にA.B.

⁵⁵ デューイは1902年2月7日付のハーパー学長宛の手紙で、コロンビア大学ティーチャーズ・カレッジのディーンであるラッセルに研究職博士号と専門職博士号を区別するつもりがあるかどうか問い合わせていると書いている。John Dewey to William Rainey Harper, February 7, 1903.

⁵⁶ *Annual Register 1902-1903*, The University of Chicago (Chicago: The University of Chicago Press, 1903), p. 132.

⁵⁷ *Ibid.*, p. 132.

(Bachelor of Arts), Ph.B. (Bachelor of Philosophy), S.B.(Bachelor of Science), またはEd.B.(Bachelor of Education)の各種学士号のうちのいずれかが授与されることになっている。ちなみに、前年までは教育学部では学士号は授与されず、2年コースまたは3年次コースを修了した時点で教育ディプロマが授与されるだけであった。

カリキュラムを見ると、前年の「2年コース」「3年次コース」「特科コース」に代えて、次の3種類のコースが設置されている⁵⁸。

- I. 芸術・技術コース (Courses of Arts and Technology)
- II. 全科コースA (General Course A) : 1902年入学者のみ
全科コースB (General Course B) : 1903年入学者から
- III. 中等学校教員および師範学校教員志望者向けコース (Courses Preparatory to Teaching in Secondary and Normal Schools)

このうち「II. 全科コースA」は従来と同様にジュニア・カレッジ相当の2年制の初等教員養成の全科コースであり、前年までの「2年コース」を引き継いだものである。修了時に学士号は授与されず、ディプロマが授与される。このコースは1903 - 1904年度限りで廃止されることになっていて、1903年以降の入学者には適用されない。

「II. 全科コースB」は1903年入学者から適用される初等教員養成の全科コースである。上記の全科コースAと同じく2年間で学ぶコースだが、こちらはシニア・カレッジ相当のコースであり、ハイスクールを卒業してカレッジ段階（師範学校、教員養成所も含む）を2年間履修した者を対象とし、修了時にディプロマと教育学士号 (Ed. B.) が授与される。1903 - 1904年度からは、全科コースAが廃止されて、このコースが教育学部における正規の初等教員養成コースになるわけである。

「III. 中等学校教員および師範学校教員志望者向けコース」は、教育学部が従来の初等教員養成に加えて、新たに中等教員養成をおこなうことに対応したコースである。このコースは、シカゴ大学のジュニア・カレッジを修了した者を受け入れ、中等学校のいずれかの教科に対応した専門科目（いわゆる教科専門科目）をシニア・カレッジで学ぶとともに、その教科の教育に関する専門科目（いわゆる教科教育学関係の科目）を教育学部で学ぶようになっている。もちろん、教育学部以外のシニア・カレッジ在生もこのコースに登録して、中等教員または師範学校教員をめざすことができる。このコースでは、履修した専門科目に対応して、A.B., Ph.B., S.B.のいずれかの学士号が大学から授与され、同時に教育学部から教育ディプロマが授与される。

最後になったが、「I. 芸術・技術コース」は芸術と技術に関係する次の8つの教科の専科コースである。

⁵⁸ Ibid., pp. 133-141, 参照.

- ・ 音楽 (Music)
- ・ スピーチ・音読・演劇 (Speech, Oral Reading, and Dramatic Art)
- ・ 絵画 (Drawing and Painting)
- ・ 模型 (Modeling)
- ・ 織物 (Textile)
- ・ 家庭 (Household Arts)
- ・ 木材加工 (Woodworking)
- ・ 金属加工 (Metal-work)

このコースは2年課程で、4年間のハイスクールを修了した者と、2年以上の教職経験をもつ者を対象とし、学士号は取得できない。このコースでは、師範学校、工業・農業カレッジ、ハイスクールの教員、あるいは大都市の学校の指導主事、特別教員、専科教員などの指導的立場に立つ教員の養成を目的にしている。案内では「既にかかなりの程度の専門技能をもち、特殊な素材や道具、器具、楽器などに精通しているものでなければ、いずれの専科でもやっていくことはできないだろう」と記されており、特に「音楽」では2年間の音楽教育を受けていることが入学条件とされ、「絵画」と「模型」では3年間美術学校で学んだ程度の技量を有していることが入学条件とされている。また、「木材加工」と「金属加工」では手工ハイスクールの卒業者が入学に有利であることが明記されている。このようにこのコースでは、現職教員や音楽学校、美術学校、技術学校等の出身者のうちで、特定の専門技能にある程度習熟している者を対象に、上記のような非アカデミック教科のいずれかに特化した教員養成をおこなう。

シカゴ大学教育学部の歴史の変遷を研究したウッディー・ホワイトによれば、この芸術・技術コースは手工運動 (manual training movement) の成果を反映したものであり、同時に、シカゴ手工学校がシカゴ大学に編入されて教育学部附属の中等学校の一部になったこととも密接に関わっていたという⁵⁹。もともとデューイもパーカーも手工運動のよき理解者であったし、二人とも手労働 (hand work) を単なる手先の訓練や技術の習得にとどめず、むしろ基礎的一般的教育の不可欠な要素として学校カリキュラムの中に組み込むことを積極的に試みていた。そうした背景があって、手工関係の高い専門的技術をもった教員の養成をおこなうコースを特別に設けることになったのだとホワイトは説明している。ハーパー学長は1901年3月の演説で、シカゴ手工学校が教育学部の一員となったことを評価して、この学校は中等レベルの職業技術教育において先駆的な役割を果たしてきたが、今やそれに加えて手工教育の教員養成にも貢献することになるだろうと述べている⁶⁰。ただし、芸術・技術コースは純然たる手工教育ないしは技術教育のコースではなく、上で見たように「家庭」のほか「音楽」「絵画」「スピーチ・音読・演劇」の芸術教育も合わせ含んでいた。

⁵⁹ Woody Thomas White, "The Study of Education at the University of Chicago, 1892-1958," Unpublished Ph.D. Dissertation, The University of Chicago, 1977, p. 96.

⁶⁰ William Rainey Harper, "The Thirty-seventh Quarterly Statement," The University Record, The University of Chicago, vol. 5, no. 51, March 22, 1901, p. 447.

2. 大学中等学校の再編

教育学部の組織改革のうちで、中等学校の再編は教員養成部の改革と並ぶ大きな課題であった。1901年7月にシカゴ学院がシカゴ大学に編入されて教育学部が発足する以前、シカゴ大学には合わせて3つの中等学校が関係していた。

一つはモーガンパーク・アカデミー (Morgan Park Academy) である。この学校は、もともとは私立の陸軍士官学校 (military academy) であったが、1892年にシカゴ大学の創立とともに、シカゴ大学に学生を送るための大学予備門として、シカゴ大学に編入された。そして、中等教育の近代化や中等教育と大学との接続を研究するための実験校として特色ある教育をおこなった⁶¹。しかし、1907年にはシカゴ大学から離脱して、再びもとの士官学校に戻った⁶²。

二つ目はサウスサイド・アカデミー (South Side Academy) である。この学校は1892年にシカゴ大学のキャンパス近くに建てられた私立の大学進学準備学校で、1896年1月にシカゴ大学の提携校 (affiliated school) となった。提携校とは、シカゴ大学による審査を受けて、卒業生がシカゴ大学への入学を無条件で認められる学校である。サウスサイド・アカデミーは、1897年に学校の管理権をシカゴ大学理事会に移し、同時に、シカゴ大学教育学科が中等教員志望学生向けにおこなっている教職課程の実習校としての役割をひき受けることになった。そして、1901年5月にサウスサイド・アカデミーは正式にシカゴ大学に編入された⁶³。

三つ目はシカゴ手工学校 (Chicago Manual Training School) である。この学校は、1884年にシカゴ商工会議所 (Commercial Club of Chicago) が中心となって設立された工業技術系の中等学校であり、1897年5月にシカゴ大学に編入された。この学校は、いわゆる手工教育運動 (manual training movement) の影響を受けて、アカデミック科目についてハイスクールと同程度の教育をおこないながら、同時に、木工、金工、模型制作、製図など、工業技術系の実業科目の教育もあわせおこなうことを特色としていた⁶⁴。

これらのうちモーガンパーク・アカデミーは、デューイの教育学科とも、教育学部に付設されることになる中等学校にも関係しなかった⁶⁵。

シカゴ大学に中等教員養成のための中等学校を付設する計画は、シカゴ学院の編入に先だつ1900年の夏から秋にかけて、シカゴ大学理事会で協議されていたようである。1900年8月29日に開催さ

⁶¹ William Rainey Harper, "The President's Report," in *The President's Report: July, 1892- July 1902, The University of Chicago* (Chicago : The University of Chicago Press, 1903), pp. cxxvii-cxxviii, 参照.

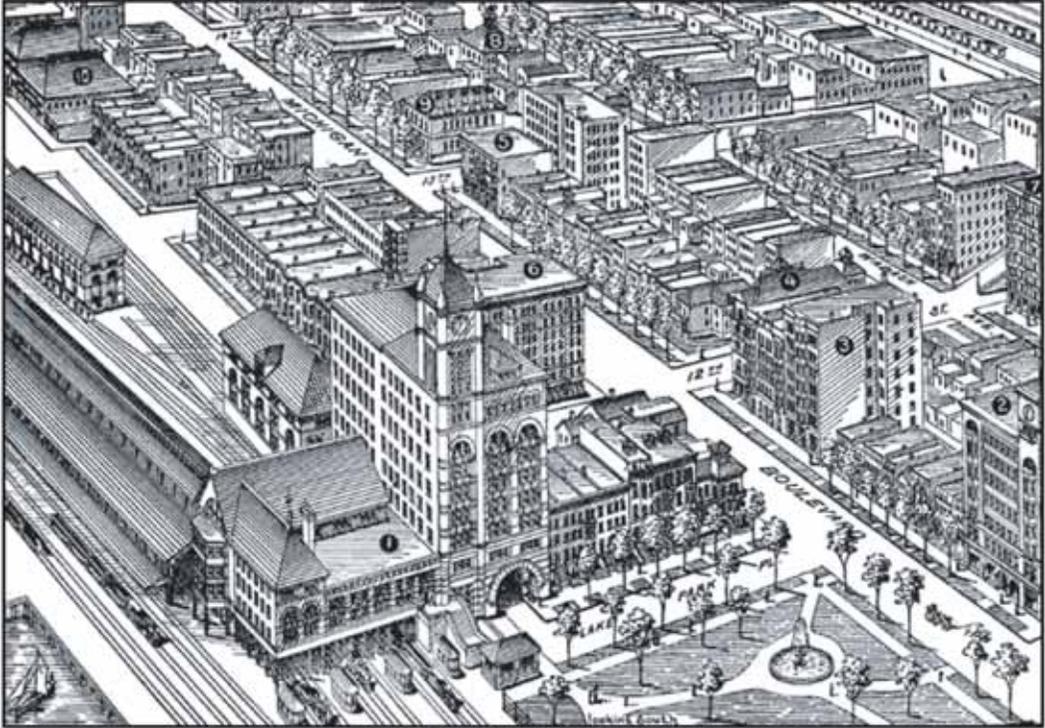
⁶² モーガンパーク・アカデミーの沿革については、
<http://www.morganparkacademy.org/morganpark.aspx?pgID=878> を参照.

⁶³ サウスサイド・アカデミーについては、Gustafson, op. cit., chapter. VI, 参照.

⁶⁴ シカゴ手工学校については、Gustafson, op. cit., chapters. II, III, 参照.

⁶⁵ ただし、この学校の主幹 (Dean) であったチャールズ・サーバー (Charles H. Thurber) は、デューイの教育学科で1896年から1900年まで非常勤の教育学准教授 (Associate Professor of Pedagogy) を務めている。*Annual Register, The University of Chicago*の1895-1896, 1896-1897, 1897-1898, 1898-1899, 1899-1900の各年度版の「教育学科」(Department of Pedagogy) の項を参照.

れたシカゴ手工学校理事会において、ハーパー学長はシカゴ手工学校をシカゴ大学の近傍に移転する計画を提案した。上で述べたように、シカゴ手工学校は、既に1897年5月にシカゴ大学に編入されていたが、学校自体はシカゴ大学のキャンパスから離れたシカゴのダウントウンのミシガン通り(Michigan Boulevard)と12番街(12th Street)の北西角にあった。下の図は当時のシカゴの12番街駅付近の街並みを描いたイラストであるが、④と番号の付されている石造りの4階建ての建物がシカゴ手工学校である。



19世紀末シカゴの12番街駅付近の街並み

計画ではダウントウンの土地と建物を売却して、大学キャンパスの近くに新たに土地を購入し、そこにシカゴ手工学校とサウスサイド・アカデミー、それにデューイの実験学校を合わせた初等・中等一貫の新しい学校を建設するというものであった。1900年8月29日のシカゴ手工学校理事会に諮られたこの計画案は次のようなものであった。

不動産の売却が成功したならば、ただちに当校はシカゴ大学に近接する土地に移転したうえで、手工学校、大学実験学校およびサウスサイド・アカデミーは一つの学校に統合される。a) この学校は初等教育と中等教育の一貫校とし、b) 教育上のさまざまな実験を特に重視し、c) その中で手工学校は、学校の設備とカリキュラムの両方において特段の配慮を受けることとする⁶⁶。

⁶⁶ Chicago Manual Training School Association, "Records," 1882-1906, pp. 284-285, cited from Gustafson, op. cit., p. 90.

ところが、シカゴ大学に初等・中等の一貫校を建設するというハーパー学長の計画案は、同時期に彼が進めていたシカゴ学院の編入計画に組み込まれることになった。1900年12月、ハーパー学長はシカゴ学院にシカゴ大学への編入を申し入れた。そして、6週間におよぶ交渉を経て、1901年2月6日、シカゴ学院理事会はシカゴ大学への編入についてシカゴ大学理事会と合意文書を取り交わした。その合意内容は、シカゴ学院をシカゴ大学に編入して教員養成の専門学部（professional school）を設立し、これに幼稚園からハイスクールに至る一貫校を併設するというものであった。その際、シカゴ学院の小学校（実習校）を一貫校の初等部門としてパーカーが監督し、デューイの実験学校もこれに統合することになっていた。また、サウスサイド・アカデミーとシカゴ手工学校を一貫校の中等部門となる大学中等学校に統合して、これを当分はデューイが監督することになっていた⁶⁷。シカゴ手工学校理事会は1901年5月21日の会議において移転・統合計画を正式に了承した⁶⁸。また、サウスサイド・アカデミーでも、まったく同時期に、シカゴ大学への編入が理事会で正式決定され、シカゴ大学中等学校（The University of Chicago Secondary School）と改称することになった⁶⁹。しかし、デューイの実験学校では、父母会がシカゴ学院の小学校との統合に強く反対したため、両小学校の統合は見送られた⁷⁰。

こうして、1901年7月にパーカーを学部長（Director）としてシカゴ大学教育学部（The University of Chicago School of Education）が発足したとき、教育学部は初等教員養成をおこなう専門課程（Professional Department）と附属小学校（The Elementary Department）、それに大学中等学校（旧サウスサイド・アカデミー）とシカゴ手工学校、大学実験学校（The University Laboratory School）の合計5つの組織から構成されることになった。これにより、形式的には当初の計画どおり教員養成部門と初等部門、中等部門が一つの組織にまとめられることになったが、実質的には初等教員養成の専門課程と附属小学校の2つだけが教育学部長を務めるパーカーの監督下にあり、残りの3校はデューイをディレクターとして彼の監督下にあった。しかも、大学中等学校とシカゴ手工学校の移転・統合はまだこれから準備に入る段階であったから、大学中等学校とシカゴ手工学校はほとんど従来どおり別々の学校として運営されていた。要するに、発足時の教育学部は旧シカゴ学院に、旧サウスサイド・アカデミーとシカゴ手工学校、それにデューイの実験学校をただ形式的に合わせただけの寄り合い所帯にすぎなかった。

⁶⁷ Chicago Institute & University of Chicago to Whom it may concern, February 6, 1901.

⁶⁸ Gustafson, op. cit., p. 90.

⁶⁹ Ibid., pp. 77-78.

⁷⁰ 実験学校の存続をめぐる一連の経緯については次を参照願いたい。拙稿「シカゴ大学時代のジョン・デューイの所管について（4）——シカゴ学院の併合からデューイの教育学部長就任まで：1901年～1902年——」『鹿児島大学教育学部紀要－教育科学編－』第54巻，2003年3月，157 - 162頁。

ブレイン・ホールの建設

1901年6月13日、シカゴ大学の創立10周年記念式典にあわせて、新しい教育学部の校舎となるブレイン・ホールの起工式が、大学創立者のジョン・ロックフェラーの臨席のもとにおこなわれた。新校舎は、パーカーのシカゴ学院設立のために100万ドルを寄付したブレイン夫人の亡夫の名を冠してエモンズ・ブレイン・ホール (Emmons Blaine Hall) と呼ばれることになった。言うまでもなく、この新校舎は、シカゴ学院からシカゴ大学に譲渡されたブレイン夫人の寄付金の一部を使って建設された。建設費は32万5千ドル。シカゴ大学の建物としてはこれまでに最大となった⁷¹。建設場所は、大学キャンパスに隣接するスキヤモン・コート (Scammon Court) と呼ばれる土地である。この土地は、シカゴ大学の初代理事の一人であったジョン・ヤング・スキヤモン (John Young Scammon) の未亡人が、敷地を亡夫の名を冠してスキヤモン・コートと呼ぶことを条件に、大学に寄贈した土地である。



ブレイン・ホール (1904年)



ブレイン夫人

ブレイン・ホールが完成するまでの間、パーカーたち旧シカゴ学院系の教員養成部と附属小学校は、大学キャンパス脇のエリス街と58番街の角 (Ellis Avenue & 58th Street) に新たに建てられた建物を使って授業をおこなうことになった。

ブレイン・ホールの建設が始まる1ヶ月ほど前の1901年5月30日付で、デューイはハーパー学長宛に手紙を書き、その中でシカゴ学院の主幹 (Dean) を務めるジャックマンが校舎の設計で教員養成部と附属小学校が入る部分に過大なスペースを割り当て、中等学校 (旧サウスサイド・アカデミーとシカゴ手工学校) が入ることになる校舎部分の建設を後回しにしているのは不当だと訴えた⁷²。デューイの大学中等学校ディレクター就任は、正式には1901年7月1日からであるが、シカゴ学院

⁷¹ William Rainey Harper, "The Thirty-seventh Quarterly Statement," *University Record*, May 19, 1901, p. 449.

⁷² John Dewey to William Rainey Harper, May 30, 1901.

との間の取り決めで大学中等学校は当分の間デューイの教育学科に所属することになっていたから、ブレイン・ホールの建設が着工される前の設計段階から中等学校の校舎建設についてデューイはかなり神経を使っていたようである。彼は、6月12日付で再度ハーパー学長宛にブレイン・ホールの設計のことで手紙を書き、中等学校の工作室と実験室だけでも当初の設計の中に入れるよう要望している⁷³。さらに半年後の1902年1月10日付のハーパー学長宛の手紙でも、デューイは中等学校の建物の計画やスペースの割り当てが自分の知らないところで勝手に進められていることに異議を申し立てている⁷⁴。こうしたデューイの異議に対して、ハーパー学長は、もともとブレイン・ホールは旧シカゴ学院が計画を立てることになっていて、その中に中等学校のスペースも含まれることになっているのだから、中等学校の建物に関しては教育学科ではなく教育学部の管轄下に置かれるのは仕方ないことだとデューイを説得している⁷⁵。

しかし、1902年3月2日にパーカーが死去して、後任の教育学部長にデューイが就任（1902年5月20日）したため、これ以後、中等学校の建物についてもデューイが直接管轄できる立場になった。デューイが教育学部長に任命される前日の1902年5月19日付の手紙で、ハーパー学長は「第2の建物について意見を聞きたい。2～3週間以内にプランをまとめることにしたい」とデューイに書き送っている⁷⁶。ここで「第2の建物」と言われているのは、ブレイン・ホールにつぐいわゆる手工棟（現ベルフィールド・ホールBelfield Hall）のことと思われる。手工棟は、シカゴ手工学校在ダウンタウンの不動産を売却して移転してくるために新たにブレイン・ホールにつなげて建設される建物である。ここにはダウンタウンの校舎から工業技術教育の実習のための工作機械などが運び込まれることになっていた。



ベルフィールド・ホール（1904年）

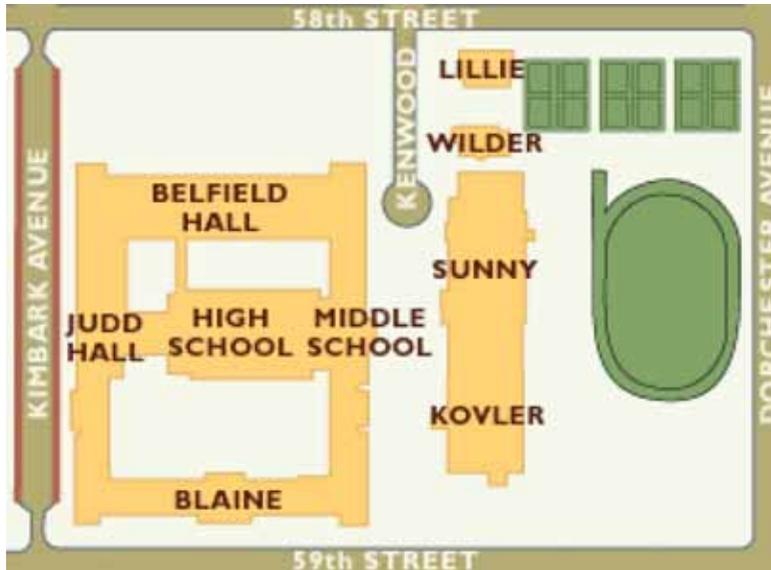
⁷³ John Dewey to William Rainey Harper, June 12, 1901.

⁷⁴ John Dewey to William Rainey Harper, January 10, 1902.

⁷⁵ William Rainey Harper to John Dewey, January 13, 1902.

⁷⁶ William Rainey Harper to John Dewey, May 19, 1902.

1902年6月3日付の知人宛の手紙で、デューイは「教育学部の建物のプランは全部できた。設備などについてはまだ検討しなければならない点がある」と書いている⁷⁷。おそらく手工棟の設計プランを含めて、教育学部を構成するすべての部門、すなわち教員養成部と附属小学校、それに大学中等学校となる旧サウスサイド・アカデミーとシカゴ手工学校が入るための教室の配置や図書館、実験室、工作室、体操場など、教育学部全体の建物のプランが出来上がったということであろう。



現在のシカゴ大学実験学校 Laboratory Schools⁷⁸ の建物配置図

1902年6月18日、旧サウスサイド・アカデミーとシカゴ手工学校は合同卒業式をおこなった。いまだ両校はキャンパスを別にする別個の学校であったが、合同卒業式をおこなうことで、形式上一つの大学中等学校としての形をとった。この同じ日に手工棟の起工式もおこなわれた⁷⁹。

1902年6月28日付のハーパー学長宛の手紙で、デューイはベネット氏 (Mr. Bennett) という建築家に依頼した手工プラント (manual training plant) のレイアウトについて報告し、ブラッドレー総合技術学院 (Bradley Polytechnic Institute) の設備と遜色のないものになったと述べている⁸⁰。ブラッドレー総合技術学院は、1897年にイリノイ州ピオリア (Peoria) に開校した工業技術教育と家庭科教育、それに古典語中心の大学進学準備教育をあわせおこなう私立の学校で、ハイスクール4

⁷⁷ John Dewey to Frank A. Manny, June 3, 1902.

⁷⁸ このシカゴ大学実験学校は、K-12つまり幼稚園から第12学年までの初等・中等一貫校であり、もとのパーカーの附属小学校とデューイの実験学校、それに大学中等学校が教育学部の建物にまとめられてきた学校である。ただし、現在のシカゴ大学に教育学部はなく、したがって教員養成部もなく、K-12だけがもとの教育学部の建物に残った形となっている。

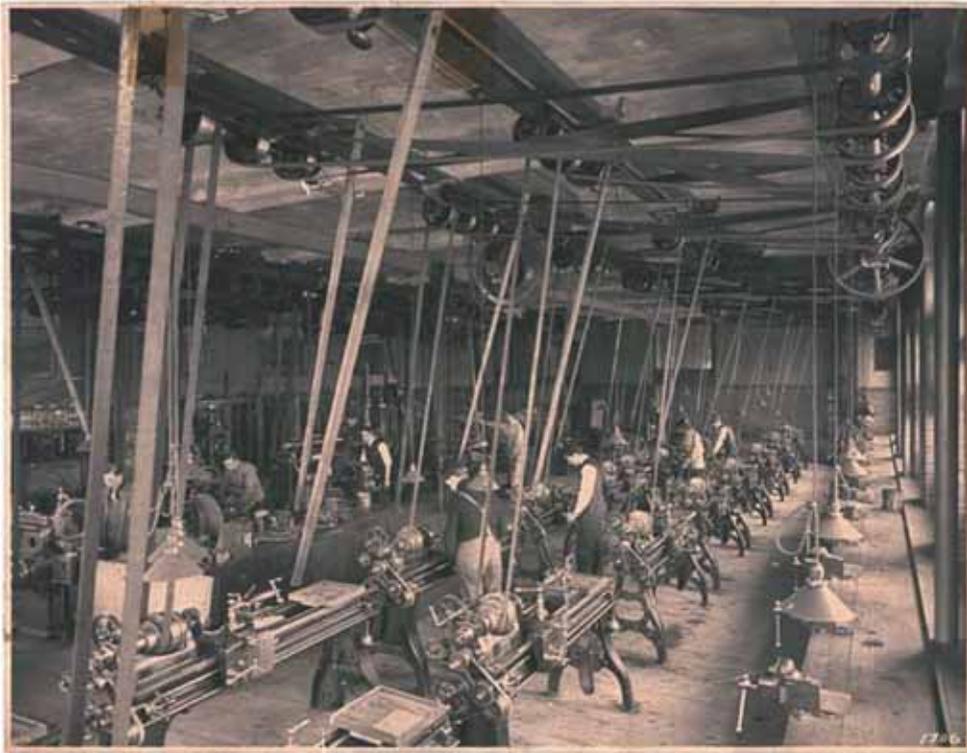
⁷⁹ Gustafson, op. cit., p.94.

⁸⁰ John Dewey to William Rainey Harper, June 28, 1902.

年相当のアカデミーと2年制のカレッジとからなっていた⁸¹。この学校は、1897年10月からシカゴ大学の提携校（affiliated school）となっている。このブラッドレー総合技術学院の手工プラントに劣らない設備をシカゴ大学教育学部の手工棟に用意するというのであるから、おそらくそれはブラッドレーを参考にして、当時としては工業技術教育関係の最新の設備を入れることを予定していたのであろう。



ブラッドレー総合技術学院



シカゴ大学中等学校での実習の授業(1905年)

⁸¹ ブラッドレー総合技術学院は、現在はブラッドレー大学（Bradley University）となっている。ブラッドレー総合技術学院の沿革については、<http://www.bradley.edu/about/founding.shtml> 参照。

1902年9月20日付の妻アリス宛の手紙で、デューイは大学中等学校の生徒減は困ったことだとしながら、新校舎ができれば生徒増も見込めるだろうと書いている⁸²。

1902年10月18日付のデューイ宛の手紙で、ハーパー学長は手工棟およびその他の教育学部の建物の諸設備について、最終決定をしたいと知らせている⁸³。これに対して、デューイは10月31日付のハーパー学長宛の手紙で、中等学校への配慮を要請している。特に、中等学校の技術科 (Technical and Manual Arts) に割り当てられた部屋には教員スタッフの部屋が含まれていないこと、これに対して、教員養成部には天文学、文学、地質学など、現在のところ教員スタッフがおらず開講科目もないのに割り当てられている部屋があり、こうした部屋の用途を変更すべきではないかと進言している⁸⁴。

2つの中等学校の統合

ブレイン・ホールと手工棟の建設が進む中で、大学中等学校 (旧サウスサイド・アカデミー) とシカゴ手工学校の移転・統合に向けた協議が始まった。協議は、手工学校から主幹のベルフィールド他2名、大学中等学校から主幹のオーウェン他2名、それに教育学部長のデューイを加えて、合計7名でおこなわれることになった。そして、1902年10月25日に開かれた教育学部の教員会議で、これを統合協議のための暫定委員会とすることが了承された。同時にこの教員会議では、教員養成部と中等部と初等部の相互関係を協議する暫定委員会も投票で選出された。デューイは自らこの暫定委員会の議長になるつもりだとハーパー学長に報告している⁸⁵。

1902年10月27日にはさっそく大学中等学校とシカゴ手工学校の代表者、それにデューイによる初会合が開かれた。この会議は「すべて順調にいった」とデューイはハーパー学長に報告している⁸⁶。そして、会議では、シカゴ手工学校は3年課程、大学中等学校は4年課程となっている点が検討された。シカゴ手工学校主幹のベルフィールドは4年課程にすることに消極的であった。その理由として彼は、従来までこの学校は3年でカレッジ相当の工業専門学校 (technical school) への進学ができるということで生徒を集めてきたこと、そして、もともとこの学校は工業専門学校への進学ではなく産業界に直接人材を送り出すことを目的にして、3年課程を維持してきたことをあげた。も

⁸² John, Lucy, & Gordon Chipman Dewey to Alice Chipman Dewey, September 20, 1902. なお、この手紙でデューイはハーパー学長と大学中等学校主幹のオーウェンが、デューイ夫妻の上の二人の子どもが中等学校段階の年齢になっていることを知って驚いていたと妻アリスに書いている。そして、ハーパー学長と理事会が、それならばもう実験学校はいらないだろうと言い出さなければよいかと冗談交じりに書いている。

⁸³ William Rainey Harper to John Dewey, October 10, 1902.

⁸⁴ John Dewey to William Rainey Harper, October 31, 1902.

⁸⁵ John Dewey to William Rainey Harper, October 30, 1902. なお、1902年11月3日付のハーパー学長宛の手紙で、デューイは教育学部の教員養成部と中等学校と初等学校のカリキュラムを調整する委員会に、実験学校校長のデューイ夫人 (妻アリス) を加えることを提案している。John Dewey to William Rainey Harper, November 3, 1902.

⁸⁶ John Dewey to William Rainey Harper, October 30, 1902.

ちろん、彼は工業専門学校への入学要件が年々高くなってきていて、3年課程ではもはや不十分になっていることを認識していた。デューイは、次の会議で妥協案として、手工学校の在學生はこれまでどおり3年課程とし、適切な時期に新入生から手工学校の方も4年課程とするよう提案するつもりだとハーパー学長に述べている。そして、ベルフィールドは4年課程に反対するだろうが、手工学校の教員たちは賛成するだろうと見通しを述べている⁸⁷。

1902年11月10日付ハーパー学長宛の手紙で、デューイは校舎建設をめぐるシカゴ手工学校のベルフィールドと大学中等学校のオーウェンの間で意見の違いが生じたので、設計家のロジャーズ氏(Mr. Rogers)に追加のデータを提出してもらったことになったと書いている⁸⁸。両校の統合に向けた協議が教育学部長のデューイにとってもかなり厄介な問題であったことがわかる。なお、デューイは1902年12月12日付のハーパー学長宛の手紙で、ベルフィールドとオーウェンの話し合いを進展させるためには、ベルフィールドに将来の保障が個人的に与えられる必要があるだろうと進言している⁸⁹。

1902年12月3日付ハーパー学長宛の手紙で、デューイは設計家のロジャーズ氏の見積もりが18万ドルと、予定を3千ドル超過することになると述べ、これは旧サウスサイド・アカデミーとシカゴ手工学校の両方の要求を調和させるためにぎりぎりの設計をした結果であり、追加支出がなければせっかく両方で合意できた計画はだいなしになってしまうと訴えている。そして、手工棟3階に予定されているデッサン室(freehand drawing)は手工学校の授業には絶対に不可欠なもので、経費節減のためにこの部屋を削るなどということはとうていできない相談だと訴えている⁹⁰。

ここには、財政的な理由によって教育活動の物的条件が制限されることへのデューイの断固とした拒絶の姿勢がうかがえる。とりわけ、旧サウスサイド・アカデミーとシカゴ手工学校を統合して新しい大学中等学校をつくり、そこにおいて中等教育についての実験的な試みと中等教員養成を展開しようとするとき、中等学校の校舎建設に寄せるデューイの想いには、単にスペースや建設費の問題を越えた強いものがあつたであろう。

1902年12月6日に開かれた教育学部教員会議について、デューイはハーパー学長に「なにも進展はなかった」と報告している。そして、前日の12月5日にジャックマンが召集した建物委員会に自分も委員ではないが出席し、設計変更について説明したが、一部委員の間に一般原則と、特に中等学校の生徒用設備の変更について疑念があつたので、教員会議にはなにも諮らなかつたといきさつを説明している⁹¹。

⁸⁷ Ibid.

⁸⁸ John Dewey to William Rainey Harper, November 10, 1902.

⁸⁹ John Dewey to William Rainey Harper, December 12, 1902.

⁹⁰ John Dewey to William Rainey Harper, December 3, 1902.

⁹¹ John Dewey to William Rainey Harper, December 8, 1902.

続いてデューイは、1902年12月15日に開かれた建物委員会（ジャックマン議長）についてハーパー学長に報告し、「一つ一つの提案と計画全体が満場一致で承認された」と書いている。そして、修正プランを急いで設計家に送るが、工事の遅れなどから工事費の追加があっても仕方がないと書いている。そして、大学理事会は1000ドルか2000ドルの超過でも歓迎しないだろうし、当初の建設計画は教育学部と教育学科が統合する前に作成されたもので、したがって当初の建設費用の中に中等学校の分は入っていなかったということを理由に、理事会は支出増を渋るだろうが、2000ドルから3000ドルの支出増で中等学校に当面必要な措置をとるができるとすれば、むしろ経済的だろうとハーパー学長に訴えている⁹²。

1902年12月20日付でハーパー学長はデューイに返事を送り、その中で、教育学部の建物計画の変更を慎重に検討したが、ロッカーを廊下に置くこととランチルームのことで疑問があるので、デューイと話し合いたいと書いている⁹³。

年が明けて、1903年1月19日付でハーパー学長は、建物の入札と設計変更のことを建物委員会議長のジャックマンに委ねたとデューイに知らせている。そして、設備面でまだまだ心配があるが、資金不足でどうしようもない、一番重要なことはカリキュラムをどう編成するかだと述べて、次年度の学生募集に向けて準備を急ぐよう求めている⁹⁴。どうやらこの時期あたりで手工棟の入札と設計変更について最終的な決定がおこなわれたようである。

1903年4月9日付の手紙でハーパー学長はデューイに、「入札額は予想より高いと思う。最低でも22万ドルしか出せない。建物の東側を省けば約17万ドルで建てられる」と書き送り、建設費のことをジョン・ロックフェラーの顧問のフレデリック・ゲイツ(Frederick T. Gates)と相談するため、この日学長はニューヨークに出かけた⁹⁵。

ユニバーシティ・ハイスクールの発足

1903年10月の新学期開始にあわせてブレイン・ホールが完成し、ここに教育学部の教員養成部(The College of Education)と附属小学校(The University Elementary School)、それに大学実験学校(The University Laboratory School)、そして大学中等学校(The University Secondary School)とシカゴ手工学校(Chicago Manual Training School)が入った。大学附属小学校と大学実験学校は統合されて大学附属小学校となった⁹⁶。そして、大学中等学校とシカゴ手工学校も統合されて、校名をユニバーシティ・ハイスクール(The University High School)とした⁹⁷。

⁹² John Dewey to William Rainey Harper, December 16, 1902.

⁹³ William Rainey Harper to John Dewey, December 20, 1902.

⁹⁴ William Rainey Harper to John Dewey, January 1903.

⁹⁵ William Rainey Harper to John Dewey, April 9, 1903.

⁹⁶ DePencier, p. 46; Annual Register, 1902-1903, p. 131. なお、両小学校の統合は公式には1903年7月からということになっている。Annual Register, 1902-1903, p. 130.

⁹⁷ Gustafson, op. cit., p. 96.

このユニバーシティ・ハイスクールは、進学準備教育と完成教育とをあわせおこなう新構想の中等学校として発足した。すなわち、この学校は、カレッジまたは工業専門学校（technical school）への進学を希望する生徒のための進学準備教育をおこなう一方で、卒業とともに学校教育を終了する生徒のための完成教育もおこなうことで、当時全米に広がりつつあった中等教育の大衆化の要求に応える一種の実験学校の役割を期待されたのである。少なくともハーパー学長とデューイの二人にとって、ユニバーシティ・ハイスクールは中等教育の実験的改革を進めるためのモデル校となるべきものであった。

ハーパー学長は、シカゴ大学の整備・拡充に尽力する一方で、シカゴ市教育委員会の委員として初等・中等教育の改革にも多大の関心をもっていた。彼はシカゴ市の教育改革検討委員会委員長を務めていたが、そこではとりわけ初等教育・中等教育・高等教育の接続をどのように設計するかが大きな問題になっていた。ハーパー学長はこの問題でしばしばデューイに意見を求めていたようである。1902年11月5日付のハーパー学長宛の手紙で、デューイはハーパーから示された改革案の概要について「ほぼ私自身の考えと一致している」と高く評価している。そのうえで、初等教育の年限短縮に反対する人々（ハーパーとデューイは年限短縮派である）は、単に授業時間数などの量的側面ばかりにとらわれて、カリキュラムの効率化と教育内容の質的改善について改革案が提案していることをまったく理解していないとハーパーを擁護している。そして、この初等教育年限短縮によって、中等教育では「中等学校がそれ自身の原理にもとづいて授業科目を組織し、時間とエネルギーの大部分を進学準備には充てないで、中等教育を完成させる時間と機会を与えることになる。そうなれば、一般教養は中等学校で十分に成し遂げられるようになるだろうから、大学では専門の教育に特化することが危険なくできるようになる」と述べている⁹⁸。ここでデューイは、初等教育を短縮して中等教育を下に拡張し、中等教育を進学準備教育に偏したものから、「それ自身の原理」にもとづいた中等教育に改革することを提案している。そして、「一般教養」を中等学校で十分に成し遂げられるようにし、大学の前期2年の課程の一部を中等段階に移して、大学では今以上に専門に特化した教育をおこなえるようにするという構想を披瀝している。

それから5ヶ月あまり後の1903年4月21日付で、ハーパー学長はデューイに手紙を書き、昨秋シカゴ大学で開催されたハイスクール関係者の会議で初等教育と中等教育の接続問題を協議する3委員会の設置が決まり、デューイに委員をやって欲しいと依頼している。これらの委員会で協議する内容は、①小学校の第8学年を中等学校に移し、②中等学校をカレッジの前半2年まで拡張し、③こうしてできた中等学校の7年間で6年間に短縮し、④さらに最優秀クラスは5年間に短縮する、というものであった。そして、これらを第1委員会は初等教育の観点から、第2委員会は中等教育の観点から、第3委員会は高等教育の観点から検討することになっていて、デューイには第1委員会に入ってもらいたいとハーパーは依頼している⁹⁹。この依頼に対してデューイは4月24日付で、

⁹⁸ John Dewey to William Rainey Harper, November 5, 1902.

⁹⁹ William Rainey Harper to John Dewey, April 21, 1903.

多忙を理由に、委員には自分の代わりにヤング夫人を推薦している。そして、個人的な相談には喜んで応えたいと追記している¹⁰⁰。しかし、ハーパー学長はデューイに「貴殿は委員会に特別な影響力をもつだろう」と再度委員を依頼している¹⁰¹。これに対して、デューイは4月30日付の手紙で再度断りの返事をしてしている¹⁰²。

なぜデューイが委員になることを固辞したのか、その理由は不明である。しかし、ここで見たような初等・中等・高等の各学校段階の接続問題に寄せるハーパー学長の教育改革構想は、シカゴ大学に教員養成のプロフェッショナル・スクールを開設して、これに初等・中等の一貫校を付設するという彼の構想と無関係ではなく、むしろ平行な関係にあったはずである。そして、デューイも基本的にはハーパー学長の構想と考え方を共通にしていたことは上で見たとおりである。それゆえに、進学準備校である旧サウスサイド・アカデミーと工業技術系の中等学校であるシカゴ手工学校を統合して新たに発足したユニバーシティ・ハイスクールは、大学附属小学校とあわせて、シカゴ大学に幼稚園から大学院課程に至るまでの初等・中等・高等を貫く一元的な学校システムをつくり出し、それによって公教育制度全般の改革モデルを示そうとするハーパー学長の構想を実現するうえで、いわば要となる重要な位置を占めたのである。デューイが委員を固辞した理由を推測するに、おそらく彼は接続問題の要は中等教育にあることを十分認識していて、そのために接続問題を初等教育の観点から検討する第1委員会の委員になることを望まなかったのではないかと思われる。事実、1900-1901年度以降、デューイの関心の中心は初等教育から中等教育へと移っていたのである。

コース制と選択制

進学準備校であった旧サウスサイド・アカデミーと工業技術系の中等学校であったシカゴ手工学校を統合して発足したユニバーシティ・ハイスクールは、上級学校への進学準備教育と産業界への人材供給のための教育を一つの学校で並行しておこなうことを特徴とした。つまり、準備教育として中等教育と完成教育として中等教育を一つの中等学校で同時におこなうという大衆的中等教育の宿命的な課題を担ったのである。しかも、上級学校の進学先には通常の大学・カレッジのほか、工業技術系の専門学校も予定されていた。こうした複数の教育ニーズに応えるため、この学校ではカリキュラムにコース制と選択制を取り入れることにした。これも、当時としては先進的な試みであった¹⁰³。

ユニバーシティ・ハイスクールには次の4つのコースが設けられた。

①古典語コース (Classical Course)

¹⁰⁰ John Dewey to William Rainey Harper, April 24, 1903.

¹⁰¹ William Rainey Harper to John Dewey, April 28, 1903.

¹⁰² John Dewey to William Rainey Harper, April 30, 1903.

¹⁰³ ユニバーシティ・ハイスクールの選択制とコース制の詳細については、Gustafson, op. cit., pp. 101-103, に引用されている1903年7月発行のユニバーシティ・ハイスクール案内 (announcement) の記述を参照。

②近代語コース (Modern Language Course)

③科学コース (Scientific Course)

④技術コース (Technological Course)

各コースとも以下の諸教科は共通に履修することになっていた。

英語 (国語) 4年, 数学2～3年, 歴史1年, 科学1年

これらに加えて, それぞれのコースごとに以下のようなコース独自の教科の履修が求められた。

①古典語コース……ラテン語4年, ギリシア語2～3年

②近代語コース……近代語と歴史

③科学コース (Scientific Course) ……科学

④技術コース (Technological Course) ……実習とデッサン

このほか, 選択科目として簿記の授業も用意された。また, 他コースの教科目の中から選択科目として履修できるものもあった。特に, 技術コースの実習とデッサンはすべてのコースで選択可能になっていた。

しかしながら, グスタフソンの研究によれば, 上記のカリキュラムは基本的には旧サウスサイド・アカデミーとシカゴ手工学校双方のカリキュラムを合体させたにすぎないものであった¹⁰⁴。すなわち, 古典語コース, 近代語コース, 科学コースはもともと旧サウスサイド・アカデミーの3コースを受けたものであり, 技術コースはシカゴ手工学校のカリキュラムをそのまま踏襲していた。

さらに, 技術コースについては, ベルフィールドがそのままディーンに就き, 残り3コースについてはオーウェンがディーンを務め, それぞれに広報 (circulars) を発行することになっていた。ブレイン・ホールに移転して公式には一つの学校になったとはいえ, 実態的には, ユニバーシティ・ハイスクールは2つの中等学校が同居しているにすぎない状態に近かったと言えよう¹⁰⁵。

ブレイン・ホールには大学小学校と大学実験学校も移転して一つの小学校 (大学小学校) となり, ユニバーシティ・ハイスクールとあわせて, 公式にはここに初等・中等の一貫校が完成したことになる。しかし, 実態的には, 初等部と中等部の合同職員会議が時々開かれる程度で, 両者の間に実際的な連携はなく, それぞれが初等部, 中等部としてまとまりを作りあげることに忙殺されていた¹⁰⁶。

手工棟が完成するのは1904年1月になってからである。完成とともに旧シカゴ手工学校 (ユニバーシティ・ハイスクールの技術コース) は手工棟に入った。後に見るように, 1904年4月にはデューイがシカゴ大学に辞職願を提出し, 5月2日に大学理事会はそれを受理する。5月14日, ブレイン・ホールの開所式が盛大におこなわれ, シカゴ大学教育学部の前途が多くの人々によって祝福された。

¹⁰⁴ Gustafson, op. cit., p. 103.

¹⁰⁵ Ibid., p. 97.

¹⁰⁶ Ibid., p. 98.